2019 年 6 月 23 日（日）「人の子の栄光」

マタイ 24:29-31

29 だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。 30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。 31 人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。

【序論】

今日もこうして一同、主の御前に集められました。教会は「集められた民」「散らされた民」としての二つの側面をもっています。週の初めの日に礼拝の場に集い、心を一つにして礼拝をささげ、世の中に散らされて行く。これは実は、極めて終末論的なあり方なのです。私たちの中には、そんな意識はあまりないかも知れませんが、これは神の民の地上における歩みの本来的姿、再臨を待ち望む信仰の現れと言えるでしょう。今日与えられているテキストから、私たちは再臨の主の姿と、そのとき世界に起きる激変を見てまいります。世の終わりの出来事と現在における私たちの歩みは、切っても切り離せない関係にあるのです。

【本論】

<u>本論１．万物の更新</u>

> **だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。**（24:29）

前回までは、終わりの時代に起きる様々な出来事について見てまいりました。敢えて「時代」という言葉を使いますのは、この時代のスパンが比較的長いからです。主イエスの昇天から既に 2000 年以上の時が流れ、それがいつまで続くのかは未知数です。その「終わりの時代」には、多くの偽キリスト、偽預言者が現れると言われていました。しかしながら、今日の箇所は、そのような時代も終わり、本当の「世の終わり」が訪れる時のことが語られています。かつて誰も見たこともないような天体の異変が起きてくる。

ここでは「**太陽**」「**月**」「**星**」についての言及があります。これらは天地創造の記事の

中で、昼と夜を治めさせるために造られたものです（創世記 1:16-18)。つまり、地球の環境の鍵を握り、生命体生存の要となるものであります。私は趣味で天文学的な仮説を題材としたドキュメンタリーを見ることがあるのですが、例えば地球の自転が止まったらどうなるのかといったことが論証されたりもいたします。地球は時速 1600km で回っていますが、私たちにそれが感じられないのは、空気も地面も、地球上の一切のものが一緒に移動しているからです。しかし、もし地球の自転が一瞬で止まったとしたら、慣性の法則で地球上のすべてのものが東に吹き飛び、凄まじい大津波が発生することになるでしょう。太陽が当たる場所と当たらない場所が半年ごとに入れ替わる世界になり、灼熱と氷の世界に二分されます。更に、自転によって生まれていた磁場が消えるため、宇宙から強い放射線が降り注ぐようになります。また、地殻内部のマントルも時速 1600km で移動するため、あらゆる場所でマグマの噴出や地震が発生します。私たちは日頃まったく意識することなく、太陽の恵み、地球の自転の恵みにあずかっていますが、信仰の目でそれを見るとき、神が地球上のすべての生命体のためにその秩序を保ってくださっていることが分かるでしょう。

「**太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます**」という表現は、何か詩的な感じを受けるものでありますが、世の終わりにはここに描かれているようなことが実際に起きてくると思われます。しかし、この表現は古代の宇宙観に基づくものですから、現代科学を知る私たちにはしっくりこない面があるのです。古代の人々は、天動説を基に、地球を中心として星の煌めく天が動いていると考えました。そして、その空の彼方に天国があるという図式を持っていたのです。地球を丸く覆う天球には天使がおり、その最高天に神がおられるとイメージされた。しかし、17 世紀にコペルニクスが地動説を唱えて以来、真逆のコスモロジーが成立し、広大な宇宙の藻屑のような人間の存在意義が問われるようになりました。聖書に描かれている人間中心的な世界観は危機に瀕したのです。詩篇８篇などを読みますと、詩人がこの小さき存在にも心を留めてくださる神を認識していたことが分かります。

> **あなたの指のわざであるあなたの天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。**（詩篇 8:3-4）

この宇宙観、人間観はどんなに科学が進歩しても失われるものではありません。しかし、その人間の目の前で、宇宙そのものが崩壊する。「星は天から落ちる」「天の万象は揺り動かされる」といった表現は、宇宙的な大変動を意味するのでしょう。そして、太陽も月もその機能を失い、地球はもはや人間が生存できる環境ではなくなるのです。それは、新天新地が現れる前に、古びた天地が過ぎさらなくてはならないからです。

本論２．人の子のしるし

そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。（24:30）

万物が崩れ去った時、ついに来るべき方が来られる。「人の子」の到来です。主イエスご自身が再臨される。贖い主／審き主、両方の顔をもって。

「**人の子のしるし**」が何であるかについては様々な説がありますが[1]、これは恐らく主イエスご自身を指し示す言葉でしょう。「人の子」とは、ダニエル 7:13-14 に登場する、終末的王国をもたらす天的存在です。主イエスはご自分をその人物と同一視しておられた。

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。（ダニエル7:13-14）

「人の子」が現れると、地上のあらゆる種族が悲しむと言われています。これは、世界レベルで主イエスがどなたであるかが認識されるということ。この方が現れたときには、誰一人認識できない者はない。信ずるべき時は過ぎ去ったことを知るのです。福音を信じるために与えられてきた期間が過ぎ去り、信じなかった者には審きの訪れとなる。それゆえに、自分の大変な運命を知って嘆くということです。

ところで、主イエスが「**天の雲に乗って来る**」ということが言われています。何となく孫悟空のような姿を想像しがちなのですが、「雲」というのは旧約聖書では神の栄光の象徴としてたびたび描かれています。会見の幕屋や神殿に雲が立ちこめたという記事が出てくる。そして、福音書において特に思い起こしますのは、変貌の山での出来事です（17:1-8）。主イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて高い山に登られた。すると、彼らの目の前で姿が変わり、顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。そして、光り輝く雲が彼らを覆い、雲の中から「**これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ**」という声が聞こえた。この出来事は、主イエスの公生涯において唯一と言ってもよいかも知れない、神の子としての本来的栄光が溢れ出た瞬間でした。しかし、主は十字架に至るまでその栄光を隠し続けておられた。

「神の栄光」という言葉は、実は読者にとって簡単に理解できるものではありません。

---

[1] ①真っ暗闇の空に輝く十字架　②特別な星　③大能　④輝かしい栄光　⑤ラッパ　⑥旗　⑦天が開ける現象　⑧「しるし」と「人の子」は同格（中澤《下》p. 386）

恐らく、この目でその栄光を見たという人はいないでしょう。それを見たら死ぬということが聖書の随所で語られてもいる。私も、入信して間もない方に「神の栄光って何ですか？」と聞かれて、うまく答えられないことがありました。それにも拘らず、自分は「神の栄光を現すために生きる」などということを言います。神の栄光とは何か。マタイ 17 章や 24 章によれば、神の光そのものを纏(まと)った主イエスの姿と言うことができるかも知れません。しかし、もっと身近な事柄として、神の栄光とは全被造物の本来的姿に現れているものなのです。どういうことかと言うと、創造のはじめ、すべてのものは良かったと言われていた（創世記１章）。環境汚染はなく、あらゆるものが完全な姿と秩序をもって存在していた。人間も「管理者」として完全であった。しかし、罪によって人間の管理は著しい歪みを見せるようになった。被造物を人間に奉仕させるように徹底して利用するようになったのです。今も尚、人間は地球のあらゆる資源を搾り取ろうとしています。神に与えられた知恵を乱用し、便利さを追求するあまり、本来地が生産しきれない量の作物を作り、残ったものは捨てられていく。日本だけでも、年間の食品ロスは 643 万トンと言われています。そして、その対極には極度の貧困がある。このような現実によって、地は苦しまないだろうか（人間の苦しみも地の苦しみの一部）。生態系が崩れ、動植物に危機が及んでいることは連日のように報道されています。これは信仰をもたない人々の目にも明らかです。全被造物は本来神の栄光を帯びています。その本来的姿を垣間見るところに、それをお造りになった神の栄光を見るのです。

本論３．選びの民の集合

人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。（24:31）

「人の子」なる主イエスは、神ご自身として、御使いに命令を下します。それは、選びの民を全地より集めることです。何のために集めるのか。それは、新天新地の担い手として、ご自身の懐に招き入れるためです。贖われた者は主の許に集まる。

それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。（黙示録 7:4）

この数字は象徴的意味合いを持っているでしょう。完全数に完全数が掛けられた数字は、恐らく神の国の完成にふさわしい人々の完全性を表していると思われます。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。（黙示録 7:9）

この人々は何のために集まっているか。神を礼拝するためです。永遠の礼拝者として神の許に集まっている。ここに「集められた民」という思想が重なり合って見えてこないでしょうか。私たちは今、礼拝という場に集っております。これは、神のイニシアティヴによってもたらされた恵みです。礼拝は招詞（招きの言葉）で始まる。神が私たちを御許にお招きくださったことを、御言葉が示しているのです。その意味で、この礼拝は極めて終末的な意味合いを帯びていると言えるでしょう。本来、世の終わりに起きる神の民の結集が、現在に及んでいるのです。私たちはそれほどの認識をもって礼拝を守ってきたでしょうか。そして、礼拝の最後は祝福で締めくくられます。N先生はこれを「祝宣」と呼んでおられますが、それは正しいと思います。神より一人一人に祝福が宣言され、神の栄光を帯びて世に出て行くのです。それでは、世に散らされる民は何をしていくのか。神の栄光を全地にもたらすのです。失われた神の栄光をこの地に取り戻す働きに懸命に従事していく。本来、世の終わりにすべてが取り戻される神の栄光を、現在にもたらしていく。それが神の民の使命なのです。

【結論】

私たちは今日も集められました。心一つに賛美をささげました。これは、まさに黙示録において、集められた民がささげている賛美と一体をなすものです。

> **彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」**（黙示録7:10-12）

私は最近、暑いので窓を少し開けて寝るようにしています。朝、カッコウのやさしい声で目が覚める。その時、いつも思うことがあります。この一羽のカッコウも、懸命に神の栄光を現すために生きているではないか。神によって与えられたこの声をもって、私に慰めと平安を与えてくれている。天国を感じさせてくれる。しかし、彼にとっては住みづらい世界に違いない。この一羽のカッコウが幸せに生きられる世界を取り戻していきたい。今日も懸命に働こう。主のために生きよう。主がお造りになったすべてのものに仕えよう。私自身を通して神の栄光が現れるようにと祈り、一日を始めるのです。

【祈り】

　栄光の王、イエス・キリストの父なる神様。私たちは主イエスによる贖いの完成を待ち望んでいます。この病んだ世が本来あるべき状態に戻される日を見たく、期待をもって歩んでおります。しかし、その回復の御業は既に神の民によってもたらされ始めているという、大きな使命を知り、畏れを覚えます。この私たちが神の栄光を地に表していくために用いられているとは。主よ、今日こうして御前に集められた私たちを、聖霊で満たし、神と人と被造物とを愛する生き方ができるよう導いてください。私たちが神の栄光のために生きることができますように。

【祝宣】

仰ぎ願わくは、
天地万物を完全なる調和をもって創造し給うた、父なる神の愛。
人の罪によって歪められた世界の秩序を、ご自身の来臨によって取り戻し給う、主イエス・キリストの恵み。
毎日曜日に神の民を御前に集め、神の栄光を地にもたらすため、世に送り出し給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。